

入賞

きれいな福島へ

福島県立ふたば未来学園中学校・2年 サイトウ 齋藤 ユウマ 佑磨

10年前まで、私の家はキノコ農家だった。原木栽培でシイタケを育てていた。そう、10年前までは。でも、原木や山が汚染されてしまったせいでできなくなったそう。その頃、4歳だった僕は当時の状況を覚えていないが、父が夏ごろに、うどん屋のアルバイトをしていたことを覚えている。除染作業をした後、田んぼは再開できたが、原木を廃棄してしまったためシイタケ栽培を再び始める余裕は我が家にはなかった。もし、栽培を再開するとしたら、県外から木材を取り寄せないといけないため、原木代に輸送費までかかってしまうのだ。「できれば続けたかった。」と父は言っていた。それと、除染してもらったため、カブト虫が取れなくなったことも鮮明に覚えている。黒い袋の中で羽化して外に出ようとし、でも出きれずに袋に突き刺さっている、目が白くなったカブトムシのたくさんの死体とともに。「なぜこんなことになってしまったんだろう。」

当時の僕にはよく理解ができなかった。でも今ならわかる。去年1年間の中学校の授業で学んだからだ。それは原子力発電所の事故によるものだった。うっすらとはわかっていたが、メカニズムや当時の状況まで知ることができなかった。なんでこんな危ないものが福島にできたのか謎だったが、出稼ぎを減らして地元の人が労働する場所にするという側面もあったそう。

そんな中、福島は再生可能エネルギー先駆けの地となっている。それは、風評払拭や経済回復のためである。地理の授業のとき、太陽光発電や地熱発電のことで福島県が出てくると誇らしい気持ちになる。僕の家も、建て替えに合わせてソーラーパネルを設置した。また、近くに太陽光発電所ができて、再生可能エネルギーの普及を身近に感じている。僕はそのまま再生可能エネルギーが普及し、福島が日本一の再生可能エネルギー発電拠点になってほしいと思う。なぜかという福島イメージがクリーンなものになってほしいと

考えているからだ。再生可能エネルギーで日本一になれば、原子力発電の負のイメージを払拭できるのではないだろうか。そのためには、発電する場所をどう増やすかが課題になるのではないかと思う。

よって僕は、田んぼソーラーシェアリングが広がっていったらいいなと考える。田んぼソーラーシェアリングとは、田んぼの上に細長い幾つものソーラーパネルを設置して発電をするという方法だ。それでは、稲に日が当たらないのではないかと思うかもしれないが、パネルの影は太陽の動きとともに動いていくから、ムラができるわけではないのだ。また、太陽のエネルギーは植物が本当に必要な量以上に降り注いでいるため、ソーラーパネルを設置して光が届かない影ができて、一定程度は問題ない。田んぼソーラーシェアリングが広がれば再生可能エネルギーが普及するだけでなく、農家の所得安定に繋がるのではないだろうか。

今後も僕は、「ふくしま」の再生のために、考え、みんなと共に学び歩んでいきたい。